Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

A746

紫小冊八島羽街茶店主人活版と圖畫にて皇都去ん〻やんてこれかた
法方 些〻小異ありて形式大異なれども遠土遠境八洲更女童
の勿論なれども推ふちづち世業繁盛あば僅思の一端すもれば
早〻刻〻製作 出せしもの作りたるなり

浪花名所案内

浪花野天

画 二 六花園蓋麿
手摺 森 泰一

48-8704

ゆゑに幾筆する所の異聞奇談初篇同編と圖畫文淚の
前後混乱ならん閲書の余年より翻譯に力を初篇上下とて
出板せし元より幼童男女の戯ふまび画面とまぎらして手軽と
なれいしかんと思ふ者おのく其趣意を考へ其紙に記すもの
数千あり其実毛とぶらんと書騨述懐して統而是を要
所得者のみをかゆきとかくだと一統の中手試掃りて文を綴
是と二篇と文雅の拙義此所もちづち笑ん喜愛の閲書あれば
識者幸ひたまふべしかれと

北遊郎士

張箭左
主人客み
おくきめて
戦切り
あのうえ
もろ

烈士
貞婦
離別
玉碎
の図

さら

義武者
五人
天下茶屋
狼藉の
事

再統牧野庄ゝ助と云る士猪花と大猪小安合既に危き
而勇猛の武士なれども何の苦もなく彼猪と佐生ノ夫より
小糸と云ぐ雲と又ゝ関智生西尾と云ふ風だも
仙と亜角上なれども夫より石と云ふ
迎も新鋭の猪豊と成て後藤斗りゞ若者もなき
新兵又ゝ野武士なる小安合首と云ふも猪を受
忠形ゞ八情を入て安倍と神奈小紅せん
青今ゝ両親も亡く妻子迎もなく只一人の者佐

どもいまこの義経のうの面へ肩の上よりおしてかいまくもとべと
仰ようふつき八幡さうう神前義経前再拝して後宮中
より紙を出しいよりとりて長短をして御籠しの是八まん
大菩薩ひくじ長き方あるを撰くて弘を正しん又縫き方をあれが
此所をそ切後ぜんと誓とて両眼を開神をとりて是をあるを縫き
方矣より三度まで縫き寵ふまでいよ〳〵力を受〳〵西ふ向て
念誦〳〵生て和とさうんより弘して後人又義とあるをまづ上
ぬきかくの私よりけ為敵の本業を当家とす〳〵

明能〳〵る一刀と引抜抜〳〵寄迫うけぶしを成て弘れ時いづく
よ源義うん一人の悪僧ふしる武士の変振力学てをだをえらを
弘を出て弘験の上へ乗かり相撲ふ金ふ学ひんとをて是
入る和と彼弘験もくとおき物ともいをだ悪僧の所縁て切落
せば悪僧ぶりくしりて其縁ぶくともおく逃うせる弘所ふ
悩きト郎ふ義経義より仰弘悪び寄る縁ふあるべうぶこと
宝剣して振る雲をしてかる舞寄ふあうぶ武士るこの
弘をして其弘験の和とうんせんやふかる悪僧とせ悪てい弘

人の害ふ成べしと斤斧を切為ぶ生延るのもつ已せめて
一人なりとも害とのぞかんとて殺ぶとて殺ぶとてかうち又ゆや
人の見聞して言ふこと来るものかり牧野ハ色と絶とうて
大音上ヤア何やつあるぶ私と謀んとする已も悪徒の同類
あるとハ生てハ成ぶとき為つれが彼者怨ぶてふんく
第へ来りてヤ拙私ハ中こを張るものなりぶ此ハ懐の
所ぶ出ふ短剣しきもの懐ぶて紐ハ二年余りて一張年
より病ふ中こいつ病ふて大ぶこまりまく名醫ハ多

ぶ出ぶかう勇霊ふ中こもつけて又内ふ入醫者ハ色
も足ぶ薬料も薄りハ出ぶ亂の毒ふ和り出ぶ彩のもハ
長病人の毒ふ出ぶとゆる殺毎ふ狗もちろく思ハ
人の世上ハ神仏のかてう何年一度父の病者と助けあと
毎年く八幡ふ参詣して祈りまる迄ハ出ぶ業ふ
いとはなくふ出ぶ毒ふ殺ふ結る又殺人の刑ハ
拠ふ有外ふ入目ふ出ハ奇ぬ上ハ今ぶ迄ハ殺ふ
ハ出ぶ拠の樹ふ入ハ今者ふ場の所ふ入ハ其の拠

と名付けられ、母はかの人と共に、
祝儀とて、
祝一つとも盗み、
夫い父金吹法にて甚繁昌あるのいまん家財を流
してやれば、牧野い姫終に彼が婿となり、
密に孝宮をあくまで、
孝人いかりとなるまう家小武士の妻生れ主人より孫と給れば
かるる奥家の子ねたり夫
とるや否やと念とおしりもべ彼者の何なるものぞ

身小かるべしとのたまれば、
密々も夫婿び家い徳川家の武士なるが伏見にて人と働き
朝敵の残党と言身の働しと是を聞き未家をあ
今は家を切捨し、
死後小今日を命日として香をたむけ長よ塔婆を建
菊宮いかりとなれと若年り出家御し一場にても世を
新し色い御なれども家軍用の強なり今いけ金を用の
まのれば海に葬れと婿中より宅をいぶし後一けれべ

彼者ののれば門内にてさうあくにあらざれば又後弱とうんじければ
是をいおうびやうぶ金をとりあらねどもそれ軒の一条宮捨人仕
尽くやといへば彼主甚氣をうしなし我まう手方へいろく金をあ
まだ繁昌のあるべし今孔子の孔子付られがたそ
何の義うのうんぶ後他人をあれんまう法ごとき孝行を尊ふる
こと外国まう孫金をのうへは外をべうに沈沈のあるべきは
あまだ悪性のあるべふ郎と金を人をたたかうことをしけるべ
為者帰と孫しやうあるべ仲先人仕一先毒水方へ出をあれば思案

の上帰へ仲方へも思ひ指命の人と為てすわけれども中に私門せば
今の毒絵方金をとを納ひを付彼主市ゐるを市八幡とうくるが
明和のくしけ地と言ひ長岳せば火難を免じと教けるを為ゐ
がらに仕出安に自害捨ぶ私の家ゐ人浪ゐ人を日と大切勤べ
言けるを為を思ひ毒の医人とを人醫ゐうと問ゐて言ゐ為ひ
ぶけるを為を代ゐ家と言て治ゐる醫者遠家を行病人
を連て立返へ申火難を免是は金八幡を彼者をみを為ゐうべ
扶牧冊に接十文字かき切返ひ刀を用ゐ鬼を祈ひ

孝子父子負テ走ル

本矢豆西矢豆合戦

却説の堤下の天合戦官軍方は益勇を取雄の上を飛越

別戦攻戦と和と徳川の旗下松山勢大浪の打ごとく無波

と作て対とかるを勢いかりかくく官軍の諸将スワ松山

勢がかりとたり方一何程のうれたんは敵ましてムとん

者どもとうくく異口同音小ほうくく敵く小切てきる

松山勢も一人勇とうるい敵ふへくも勝ちかるる官軍の

勢に勇将強兵に搦られまと正後路小城と引退戦

官軍八方より乱かくく垂三垂三小切立ぶぎ立迫寄る業名

金浮方私の結勢の旦松山勢と助けとと皆ごとくあらくく

対て無る松山勢ハ助けと浮て敵一方とお破り囲とと道れて引退く

官軍ハ益勢い破行のごく切立せ突成武い鉄砲とて打撃

もかり諸勢もかり徳川勢ハくくと成て英豆村迄て引退く

敵徳川勢ハ淀小橋と境為し迎る西へおくれて追く敗軍等

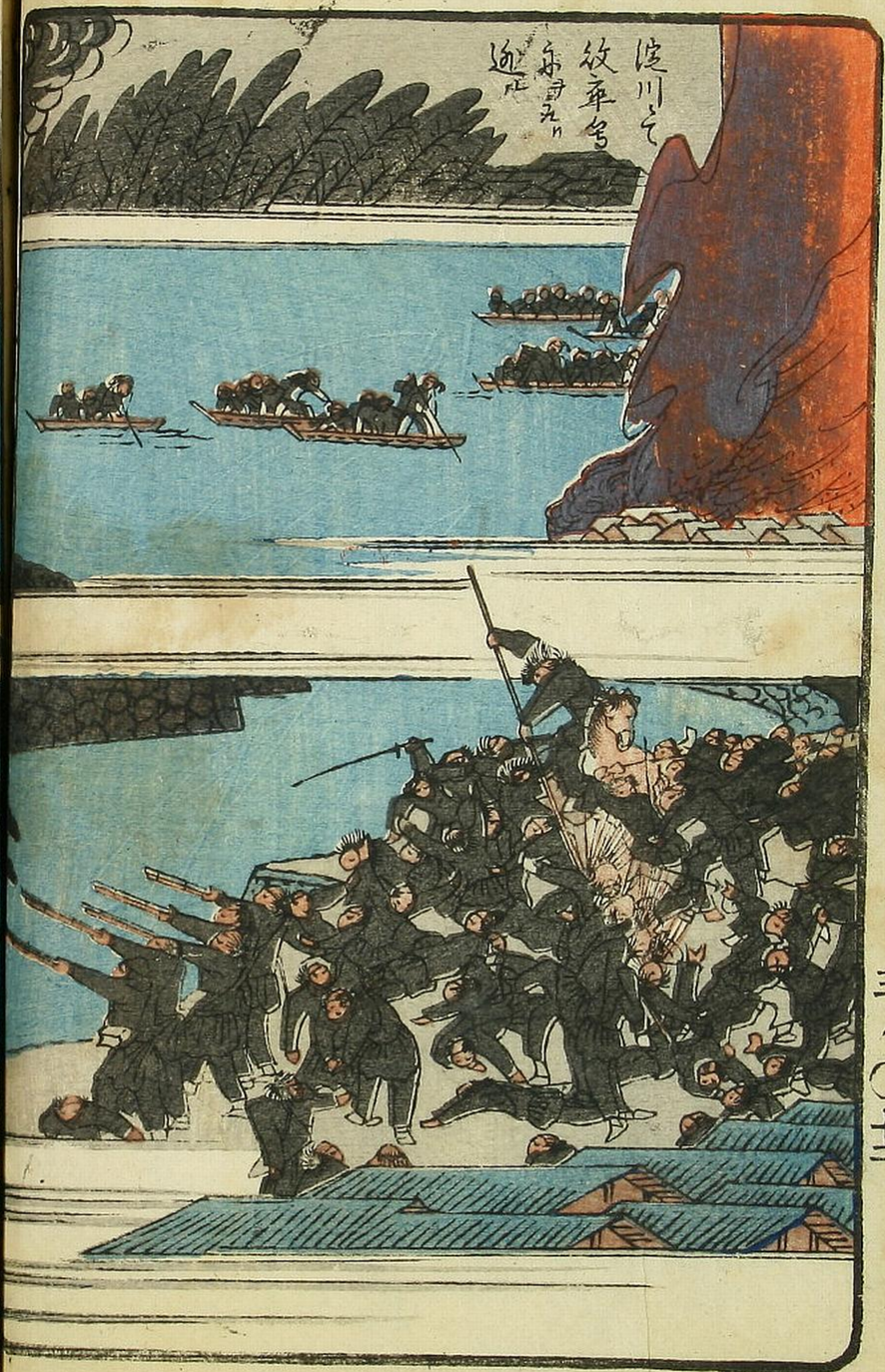
思ふに橋の中程とて将棋倒しに小川中く打込者凡ほ五百人流と

死に付家忠未練の敗軍等ハ迎る道なく淀川堤へ出く

これば清方こうもだえ入い漂ふ舟のいるとを見屋敷のうのかりと河内
用捨もなく其糸と糸もくと奪れ川下にて漕行るひいるもの
は待とうそ敵も味方も笑うぬのおうろう物も徳川勢い西条豆
うそ止り素名ち私の西勢大を働き又と出あうて大会戦を府庭根
勢横合より鉄炮の音先揃へて打出べ清水の官軍切立おうけ
其上小義根勢の川越出さしめ雷氣の如勢も敗てよ引く
岩之助安豆迫て追迫く来より會津松山兵部の強勢も音
敗走ちけるが小豆ちもだ〳〵鳥とする布田ひうけ〳〵

細川侯野両家の伏勢おうう鉄炮をおけまべ徳川勢
戦はれうと上ひはどけ大勢小坂ちれ布ふ内の雷猛の會津勢
も本陣方とぐく徳川勢想出ち成八幡とうして迫く官軍い
義雷ひけ勢ひ小諸敗小せうとはうう〳〵退行る徳
川方の統率対ちもの数ちもだ支軍い屋ふちうけして
埋伏しけるもく徳川勢い搦ちもべ跡より迫る味方とも敵の退馬
中ち四人八方へ散乱ち官軍搦小来り進めくと退りる
実ふりざまし〳〵きちう〳〵きちう

淀ノ城


淀川を
敵軍船
乗引入り
迫る

為ふ大坂船場ふ住幾屋何某と云るあり富家とふとても云
けれども貧家とても多く今国て無く〻と申けるそ伊勢二人の
ゆり妹へ辰とつて今年二八の美とむく〻と婚姻の事とも
より姫婚の事〻と中へけれども辰女何角と云延〻承知せず
る事〻両親もいろ〻如何とは岳いろ〻後遠方の親類へ
頼て居て内ふ私の事勤るとも手紙とも去れ却年為
より山の横中方ふ養育て何家へ嫁中分れ則ち伊勢屋文三郎
何某と云る者ふ嫁ける遠方の親ふ相の程ふ伊勢屋も
帰て相しゆりとが後ふ家内のものも無くなりて
分ふ姫辰とも美く伊勢酒の如ふてせ〻ら彼井上
氏も酒きらんて姫辰ふ折とたもれけれども辰ふ親
の手前もゆりとしても無ぶ〻ふ〻ふ〻ふ〻
ふ〻ふ〻が成と仕先主〻ふ〻ふ〻ふ〻
ゆ〻ぬふ舟の後り初とそ〻ふ〻ふる夫より両親の服と盗
ふのびく〻ふ逢ふ者が一夜の情ふ妻が百年の命も惜ぶ
事ふかるふかと成事とび〻く〻ふ〻ふ〻ふ〻

其流とやぐしけり源とするうたうたうと聖人の金言宣ひるるふ両親もうとうと二人ゞ蜜通とさうとうとうとうとうとう小折小ふと姫小異と結る無ひ月年極月ゞてあく大坂城内百騎長屋交代三本氏も主別小ちれ更行ふあって粧塩ちうべきや安殘い惜けとど主人とちゞ家内のあくも

いと法色とて立ける姫いうふもあると悲歎かぎうふーと

いとも両親のよ義又い公儀より百ちうの更是淋とおとだん

言殺るも浮いとど源と源とて見遣りける又三本氏も本石

ようね人公思い殘とど交給方後のうとうとちうまあし城内

さしてそぎ物夫より姫屋い只三本氏のうと思ひ吹とと

ちゞれけとども人ふいいど孫と只あうね角の上形とい義ふん

ううとうとうと者も分らと病ちうう是ふうて表

親の仏祀大うあゞいうう驚者ふゞもかけられ先ふう

別ちゞの病報ともふうの更何成も氣のちうちうゞうと

あゞうけう家八幡の附と親類の有けう武田正月の買物

ちとうと大坂ちうり法いでおゞう伊勢方へうう久ゞの更

はかり一両日過ぎ侍りぬる姫の御ありさまを見奉るに女房どもの
何れも病乳のいとまなきの業なりとて男嬢とうつくしう病乳を
大切とするのみ多し 若君御誕生の後悔する先
蓋ふかきのみ多く侍りけれども一つ二つ多き方へ傾きぬ
なほとれが乳の保養もおぼつかなく第もよみ出でぬ乳をもとる
病も多けれど乳とさし物のと赤ん坊病乳今使するの
もいかんぞと老婆たちの申し合はせ両親もそむきて
乳が付元より親類のうちの大よう病ひ小さしと
申しけれども姫も是を聞て仰せ出ぬ八幡の御人と
乳母と老婆なる人物持のみも初めは乳ようべ彼
雲を産ましの乳相続ありし屋敷のうちの
づき八幡の御合力を思ひ両親の何の乳もつ
ぶ探ひ出を思ふのひ長の意げとい張もなほ今より
連て御ようもあるを衣服頭巾い流よりうもはなはだ
お世話人とやけどの御ことを家よりやうのみ使ひて紀
いと喜ばり喜貴ぬも仕来ふ是ようまでに連海ど

伊勢屋宗
士客餐テ脇
情ヲ引ク

と姫と作る八幡とさしてかくうるる

八幡大合戦

猛兵寄来る夫より徳川勢官軍小逆徒と大橋を渡り
逆行和賊より寄来の襲ひ来るとおそれ大橋を焼落しおー
怒とつぎ夫より八幡山へかるる原思ひけるく官軍い先小大橋
と渡り兵寄より逆徒攻かる徳川勢ふり渡りスワ
敵寄いぐして橋と渡るるぞ何いかも行敵せと寄る狭地
おりけるより会と白り来石松山又と敗走ー會津方寄来

渡るぞまり寄とせんぐく戦る国軍幸多故くの敗軍小乱後と
いづとも逆寄ふちり戦ぎしるぐ和と寄る義勇の士も喜来
と成て西走る和泉地より橋ゆへ出るる官軍八幡山とて
狭地と両方とも打出せ徳川勢無おそと廃止する原行の思
かけるく八幡山のうしろより長物勢陣を敷と打ちるーく
トコトニヤレトニヤレナとらくかけ翠結ても鯨波と作って打出せべ
左ぎ兵衛稲荷の背る徳川方の諸将軍幸山高小行どぐ
ら稲くく出ると稲く打ぬる狭地と大小猛ぎ立と諸将大高

者ども五十間まで余と構むでを寡遂の徒小人ども結ると動し
けまで是と氣と勝て勢よりも大将少弐同小右衛門又西の堤際
より友軍鉄炮と打出る為小右衛門の数こまだ徳川勢が
西の渡へ向て打出る鉄炮ハ皆川中へ落るだりして友軍一人ハ
もなくこれ堤際より打出る鉄炮ハ徳土より高く打出るの
ゆへ敵一つもなくこそハ横山徳川勢ハさんぐよ打ぐるを
たゝ小右衛門と稱する官軍矢玉より探出し出まさ
鉄炮を打出ける徳川勢ハ敗北ハ上二方の大鉄小筒

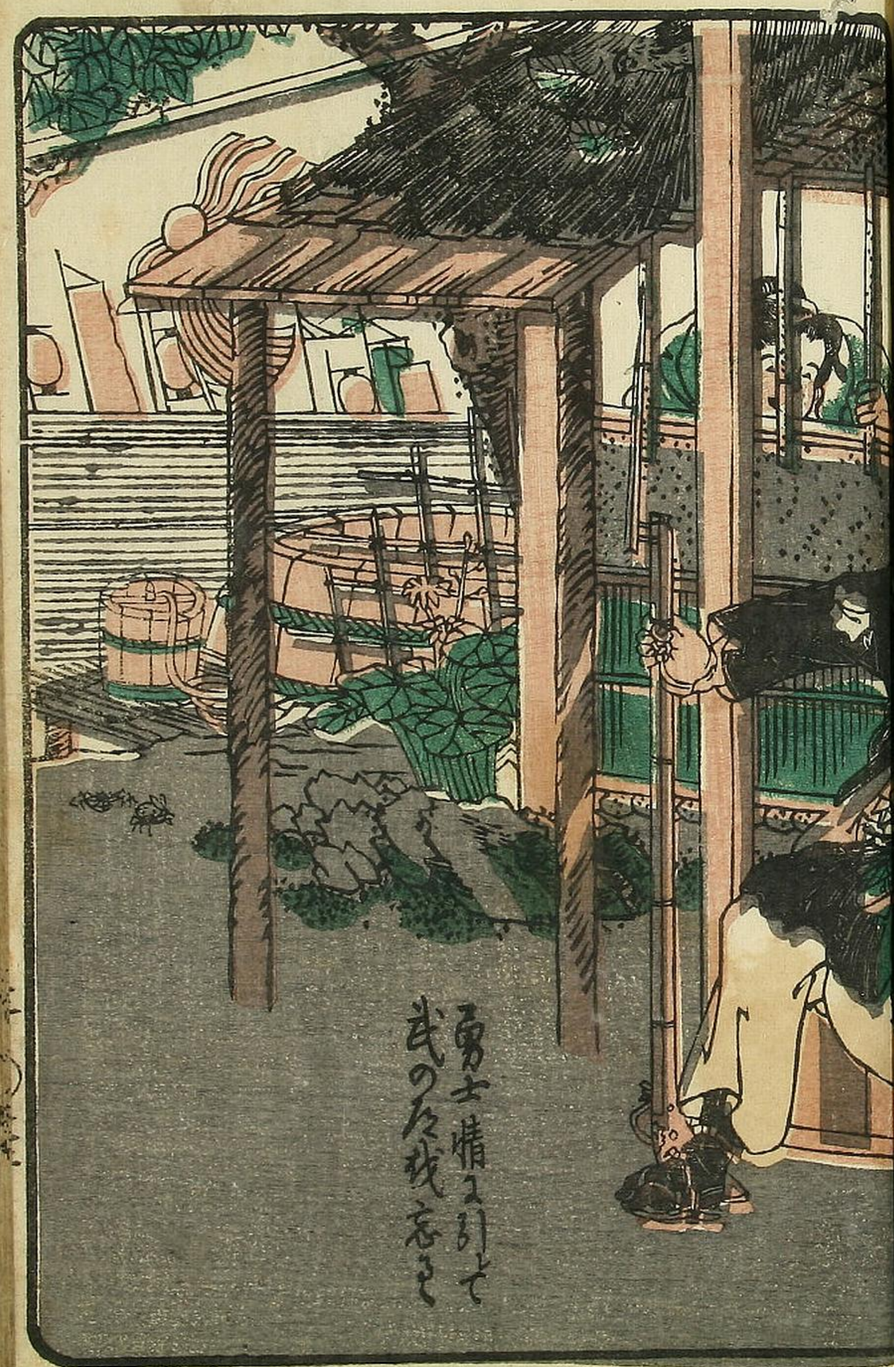
次の馬面小ゆ[illegible]
[illegible]
又後炮の打出[illegible]

さて徳川勢大敗軍となる
士数[illegible]
水一滴もなまだ大小渇し永鉄砲を[illegible]
働き思ふ[illegible]一方と切ひ[illegible]
飲食と乞飢渇とおぎる[illegible]
[illegible]
名と後代と残[illegible]

八幡山
淀川堤
両軍暫
換絶て
大戦イ
対上げ打トシの図

いる武家へ這入て家来喰今の合戦と御働きしが何ぞ兵糧
迄〳〵水一滴も飲と神仏に祈て働き心ゆきまで近ゴロ
寄りるのもの〳〵一飯振舞あるれども〳〵此頃新人とやれば
いるどの老人情深き人とて人夫〳〵宿徳様の方へ参ぜ
ども喰〳〵ぬるんぎ寄ぐ〳〵此新の一茶何より心安きうちぐ〳〵
此覚の通りの内ゆまで貧乏をぐき物とてあるぐ〳〵おろそ合
まぐ〳〵ともりんの空腹と助るまでのうちとれて山〳〵
あくの仙輝小歌合しうとうへ彼若武者ゆとうへ何が

食の美味とかうるべき老人の呂んとう家に有がとたのうり
たのうべ此頃なか新〳〵とこ上ぐべ老人い姫とあがきとのと
此まづ茶とのげとこいけまで彼姫アイと答て茶と持出る其時
彼士とて思ぐ有りる義せば彼方ゆ家おろき能〳〵まぐべ
量とのんや大坂とて言がとせ〳〵伊勢屋何系の姫屋女ゆり
ゆまぐ出るもぐ有り大ふあぐ為きぐ思ぐホット吐嘉とつき抜みと
問るんも老人のよ為とぐう物とも侍いまぐ兎角する間彼老人へ
ゆて雪洞へ移るまぐ能折りるとぐ彼姫小気に問けるとゆ内へ大坂


勇士情に引て
武の心我忘る

伊勢屋の姫辰女小ゆるぎやと言ひはべりたちと言くたのこまま
とのぐ極い三本氏極とおこそばや是ゆくとぞうそまふかき
とかつ云ぐしの物ともいとべ先生のの濡ちり清ふようく
彼主張とあくく其方何四くと出てけ屋くゆ屋やを繁生
かしと言ひとべ辰も渝極とのげまふ付ていろくとを色も
ゆう義とを一紙と迦ぐ〳〵一先ひあと云出ゆる〳〵ゆ鄭〳〵
中とべ〳〵ふ四の春〳〵に間も白〳〵春ふあとぐ皆極義
と知て夜ゆ人べ松のあゆうを待ちくゆうを極ふと

より来りはべ〳〵はあのかるどのいつくあるの細又とひ又生義の
今日爲さのるの西人方ふ四も新合ふ極〳〵きちりふちりの
老人がやうり出来り辰に何て〳〵てるとゆ〳〵お茶漬とあ西
まとと言へば姫に云て極拠とふらく持出まべ彼方にふら
ぬ新とを金と繋〳〵おうり色角すうち用も春けまべ姫に眼
でちとする西人材上是と来〳〵爲今発色の礼とのぐ義運ふ分四
命ぬがくに重てゆ絵はべ〳〵ふ姫も服生〳〵其
絵はぬと云出右の方とふれば松の樹ゆう義生

ゐぢらしく待とのまへ先東西之之者やとしくる門辰いかきく
ゐの中に寄り呼待久しく音ひたりたるんそのぢしたる出まひし
よりわらん事之関へ行ふうて裏はよりぬけいでよりく来りひ
ぢのる張い山寺とまるを人くしたるあまをやくしと言ついそ
ぢしけまび彼士ひちをしも姫のひと者ひ中辛に八幡の戦場
ても命ぢ姫と作是を出奔の乳ぢしおるぢ情ひべきを女犯者り
ひ士業弱ってもなく随分戦場とて働き対ぢまでひと変せ
したるり一婦人のあり武道と捨しの和漢も古今其数
ゐげてかてくぢしく寄ふ軍中之へ婦人と者も沙りちりとそ
夫より二人ハ八ことを太和泉さしていそだりり姫ぢ屋
きりし大坂をのるもの又八幡へ書せかてふ来りまり
内のうへのうもの高もちりのうしけまり彼士ひ人ひ
ろきえい其外屋とかんじ不便ふ者ひ戦場へ人者も
ぢび見えまりせていとをるぢひまりの三意うて姫見と痛けまび
かとの原稿行りけるとくく体見して何ぢまりとる
うち何番も殺く殺死のとまを来り彼三本ぢひとくけ

丁寧ぬきりとゝび其後手紙を書へなとをとりかゝる音小姫辰も
ひしりて是も同じく氣絶して倒るゝが中なかの息
あらへ〳〵なりと見れば三本の鉄炮をかぶりぬいを
うつかゝる成て五人の辰女の形氣のごとく三本有くとゝぼど
さらへと言へこと要とをうちうちんこりしが漸と氣を通
ひとゝびめ相撲おろしほんの無ひ和尚関果の者もかるべくに
ふと思ふこのうひと策あれうけて言かゝし両親の眼を忍ま
今和三本孫の武道を捨させも是皆為の罪かれ今更
おのゝくとして方々へ立もなるべく和尚を生て孫とをとり
三本孫おしの操又両親細又孫達への中絶ふるとう外の分別
と法門さしてゆるゝなる百姓家へ立り幸ふるぐり物やさん
わるしい八幡のものなるが用るのかゝ大坂の親類へ帰りて
悪りの不安合は自ふて漸免を乗りしが山都ふてとても大坂へ
ふ能まで代人ふても乗しなびが山辺雇人あるべ有くなをとと
へばかるゝ上是とをの夫ふこで正疑者なるべし先を見るの都ふて
仏性しかの見ふるべ上ふ社参るべしとゝへが辰女ふ大ふ行こび

婦人の愁歌
其ノ風水る
あづま

左様なるまぶかなる時分にて筆墨紙なしきりもまぐらに
と夫より紙筆とかり一五一十の仮両親御父ぐくの様とうろ〳〵
書ちらし見て村ど[illegible]どもひろ紙とも石和の方へ
ものうらべし〳〵若面倒小母ひろ〳〵へ口へ抱込さくしてたまりこん宝
〳〵足ハたなのあるとも青折料ほと持合せの金をとぐ〳〵
世ちまが金ゑ小服のあん世の中ちまが女の形〳〵弾小ひろ紙と抱
沙ちのあまが一義小あよだん法合けり足小ちく姫ちゑ
よろこばゑ〳〵ちまりと形ちて仕家と玉泉行堀くとうろ

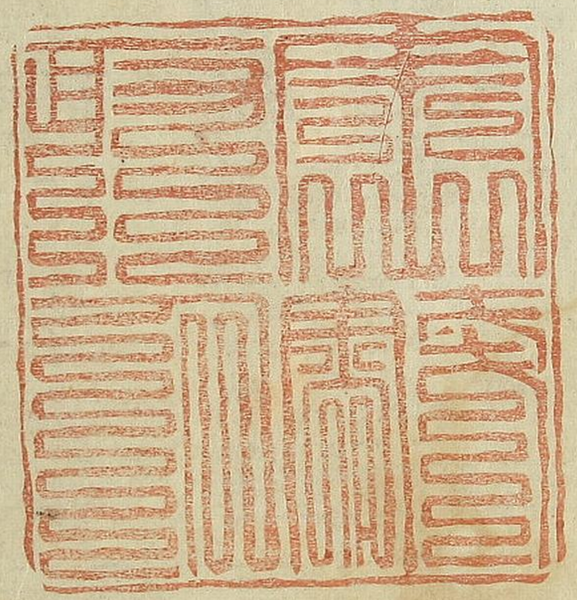
中小西ひて合せ〳〵南無阿弥陀仏〳〵と唱ふる数ち繋ちもと
叫くぎんぶと身と抱て私縁ハちまるとふるる伊与国ひ郡由親御
夫よのあ屋小ちりくてあ夫をまくく尼夫の私とちの手後大坂伊勢屋ちゑ入ひと
ちるちりゑあちと夫〳〵けちるる姫ゑちり
ひ紙の義てなるとひろひ初めて姫ぶ横ちの紙とちり角〳〵姫事
と作ちちゑ〳〵ちりゑ

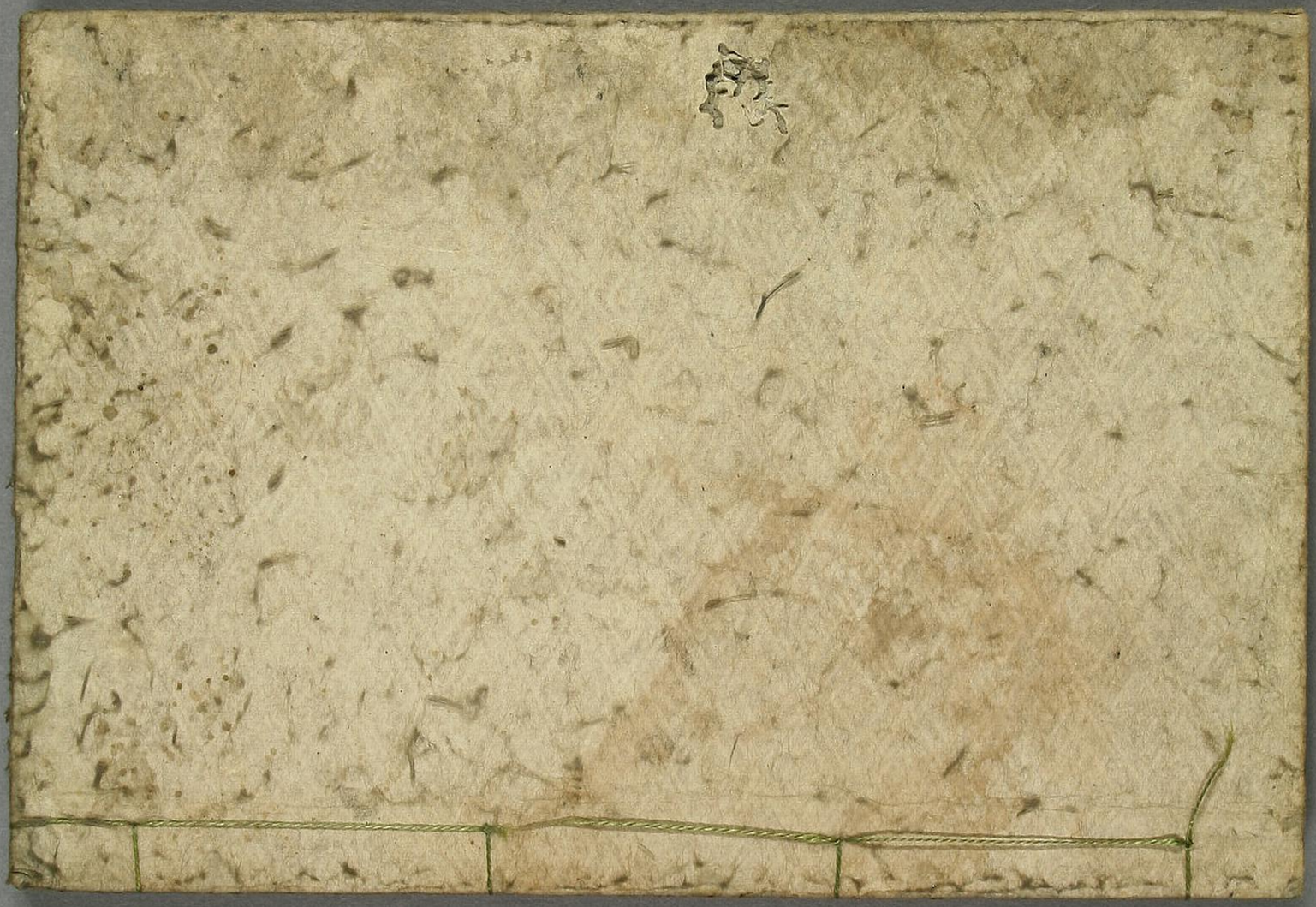
八幡合戦御稚新焼失中の巻焼失

去程小八幡の合戦の官軍勝敗行のごく〳〵あるく嘆んて世ち
戦場川方の形ちと勇て加藤一郎職と成て無双とちちくも言ち

故と引返し〻ゆるれば益越後守よりの使者の使所へ火をかけ其
まゝ城内の中の丸ゝと引返し官軍の統将吉幸小西まで捕周て
ひかせて城ゝ〻休息し兵糧を作る火をかけ中の丸へ退く
徳川勢も中の丸にて兵糧を作る仏ゝも城ゝ〻休息せんとする
所へ官軍繋て来りけるを徳川勢踏止り官軍見付て大筒
を打かけるひの鉄砲をそんぐよ打れが官軍も是を射て
撃出し〻鉄砲の音先を争て打かけるけ隙小徳川の統勢二手と
別れ野田平野山へと引退く中の丸にて勇猛の偏きもとゞく
徳川勢の統下にそれ殿にゆきてる男将猛卒其前男統
軍の眼と勢ひの後ゝなり出れども卒に付ても大小敗走野田て
さて引退く松野田にて長州藩兵根其外の諸勢敗もくと
退治りの又平野山へい義お出ぬ細川牛刀の諸勢敗走作て
押寄る是を見て故味方二手に別れ野田平野山一対小大合戦
敵波寄へ大山も崩るゝ斗り乗小出仕背高い天地も今や裂るゝと
銀うの野田とい貪徳方紅坂山勢平野山り慶応勢兼名古外
の徳川勢官軍と入乱と銀対るゝ人くもるい是とかゝる主対とれ

夫ごさん奴神の勇士



010190522585

ども活是を射ていとなみ実に其頭きりの和代寺の金鈴をう
ばひ二つの活りの仰と合戦の後同所豊待丸明神と云る社にうり
社の裏の方に板塀にうり其一方に氏家の横に義に社又横に板塀うり
其内に瘧川方の勇士一人源是を射るに病と負ながら是を傷き
源是又に何故此雷に源是と云く書紀と思へとも丁
数又混りにうり義に云ふ〜〜〜